

●花房尚作（曾於市在住）

どうして無駄な政策をいつまでも続けるのか。どうして変えることができないのか。その疑問の答えとして「行政の無謬性神話」があるとされている。

謬とは「誤り」という意味で、無謬とは誤りが無いこと。

官僚や政治家は、現在の政策が間違いであったり、時代遅れであったり、無駄であったとしても、それを認められないというジレンマがある。なぜなら、政府の政策は数十年の長期スパンで行われ、その利害関係者は膨大な数に及ぶからだ。間違いを少しでも認めてしまえば、政策を実行してきた膨大な人びとも間違ったことになる。もちろん自らの立場は危うくなり、所属組織の評価も下がる。

そのため、万が一にでも間違いを認めてはいけなく、間違いを起こさないことになっている。官僚や政治家は「失敗でした」と絶対に言えないし、様々な理屈や言い訳をつくって正当性を主張する。

この「行政の無謬性神話」は、現状維持の思考に向かう傾向がある。政策が社会問題に対応できていないとしても、無用な波風を立てないよう、これまでの前例を安易に踏襲する。社会問題が変化していても、

従来の方法論に固執する。素晴らしいアイデアがあったとしても、新たなチャレンジを嫌う。社会問題を正確に把握する努力を怠り、政策成果についての適切な評価も怠り、データの利活用や取得さえも怠る。なぜなら、新しい試みは批判され易く、前例踏襲は批判され難いからだ。

そのため、私たちの社会にはデビッド・グレーバーが提唱している「ブルシット・ジョブ」のような、クソどうでもいい仕事がたくさんある。その一つとして議員の仕事もあるだろう。国会議員及び地方議員の数は地域の人口に対して多く、地位や報酬目当ての議員が多数いる。地域の役に立っていない議員であっても再選してしまう。なぜなら一定の組織票を持っているからだ。とくに税金の恩恵を受けている仕事のほとんどは既得権益化し、組織票の温床になっている。

現在の政治構造は、一定の組織や属性に補助金を給付し、その見返りとして組織票を得る。税金の恩恵を受ける者は、補助金を貰うのが当たり前と

いった感覚を持ち、その権利を決して手放そうとはしない。

しかも、政府は新たな政策を実施する過程で、更に一定の組織や属性に補助金を給付する。新たな

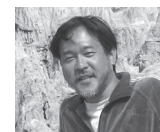
政策が施行されるたびに補助金が配られ、政府の歴史が長くなるほど財政支出が増加する。これにより国家財政が悪化するのだが、税金の分配方法に不公平感を持つ者が多いので表立った増税が困難である。そこで、社会保険料の割増しや国債発行による借金で赤字を補填している。

つまり、政府が政策手段として補助金を配ることで、税金の恩恵を受けている組織は保守化し、リスク管理の観点からチャレンジを嫌う。いつの間にか競争意識が損なわれて発展と成長のための意欲を失う。実際に政府の補助金事業のほとんどは成果を上げていない。

たとえば、過疎地域には多額の補助金が60年以上にわたって配られている。その結果、地域に既得権益が蔓延り、現在では手の施しようがないほど保守化し、地域経済が衰退している。

とくに過疎地域は従順さを尊ぶ意識が強く、「行政の無謬性神話」の概念が根強くある。地域行政に対して批判的な姿勢を取る住民はほとんどいないし、「お上に逆らうな」「言われた通りにやっていたらよい」といった考え方が強い。マスメディアが行う報道番組などの政権批判には同意しているが、それはミーハー的な側面が強く、いざ、官僚や政治家を目の前にすると驚くほどの従順さをみせる。

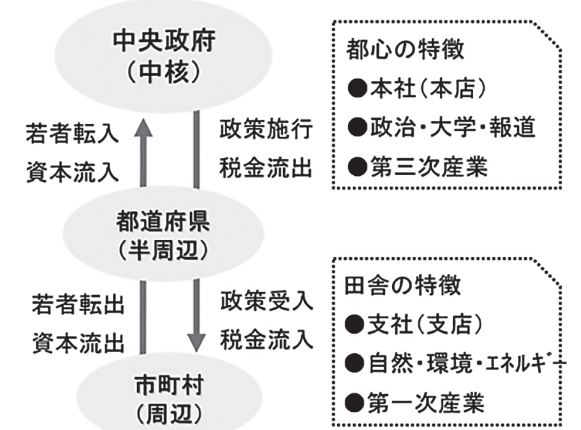
その一方で、我が国のアニメーションは



花房尚作（はなふさ・しょうさく）

放送大学大学院修士課程修了、人類学修士。専門は、田舎（過疎地域）の研究と、価値観の多様性の研究。大隅半島の現実を伝えた著書「田舎はいやらしい（光文社新書）」で注目を浴びる。その他にも劇団主宰など多彩な活動分野を持つ。連絡先：info@sho39.com

日本の中央集権システム



出典)筆者作成

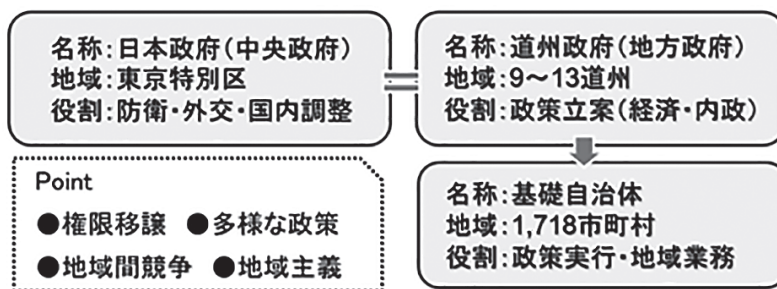
世界の最先端を歩んでいる。それは政府の補助金政策で発展と成長に至ったのでは決してない。需要と供給による市場のメカニズムと、よい作品をつくりたいという情熱によって発展と成長に至っている。

そこで私は思う。

あらゆる補助金を廃止し、競争原理と公平性に基づいた社会構造に変えてはどうだろう。あらゆる既得権益を排除することで、市場の活性化が促進されるのではないか。具体的には、道州制による地方分権改革と、ベーシックインカムによる社会保障制度改革である。

道州制で既得権益を排除し、地域間競争の促進を図る。その一方で、ベーシックインカムで公平性を担保し、人びとの生活に安心感を与える。この二つの改革は同時に進めることで人びとの支持を得やすくなるだろう。

道州制システム



出典)筆者作成